第三章　沿道の文化財

(1)　三郡境の塚

この塚は「三郡境の塚」と伝えられるもので、現在も会津若松市、会津本郷町、下郷町の境界となっています。

その昔「大内峠は涙で上る　泣いた涙が沼となる」と馬子たちに唄われたこの三郡境の周辺は、一、〇〇〇m級の山々が連なる下野街道の中でもひときは険しい道でした。

会津藩は、この峠の険しさと積雪の多い土地柄を考慮し、毎年十一月から翌年二月までの四ヶ月間は、峠を継ぐ大内宿と関山宿に、御定め賃銭の七割の増額を寛文元年（一六六一）から認めています。

栃沢村から火玉峠を喘ぎながらよじ登ってきた馬子たちも、この三郡境の地で一息し、ふたたび大内峠の頂上目指し歩んだことでしょう。

またこの地は、藩主通行の際の御駕籠引き受け地であったとも口碑は伝えます。若松城を出立した参勤交代の行列は、大内宿まで残り一里のこの地で、関山宿の人たちから大内宿の人たちへと引き継がれ、参勤の途について行ったそうです。